俺山

木村さんの俺山 season1 別冊

OREYAMA

2012

Not for sale

中部山岳帯を行く
木村さん登頂の歴史 今甦る 12 座

霊峰に崩れる
白山・御嶽・三方崩山

近郊の山を縦走する
各務原アルプス・伊吹山北尾根

憧れのアルプス第一歩
焼岳・笠ヶ岳

絶景と奥深さを味わう
銚子ヶ峰・蕎麦粒山・霊仙山
横山岳・三方岩岳

なぜ山に登るのか
そんなこと考えてたら
山なんて登っちゃいられない

木村さんの俺山

木村さんの俺山 season1 別冊

俺山

OREYAMA

本誌の写真・記事の無断転載を禁じます。
落丁・乱丁などの破損はお取り換えいたします。
Copyright © 2011 木村さんの俺山

中部山岳帯を行く
木村さん登頂の歴史
今甦る 12 座

木村さんの登山も近郊の山からアルプスまでいろいろチャレンジしてきました。登山はいつも絶景が楽しめる訳ではなく、期待はずれの時もありますが、それはそれで一つの山の姿。

これまでに撮り溜めた写真のうち、12 座をセレクトして一冊にまとめました。素晴らしい景色と木村さんの勇姿をお楽しみください。

CONTENTS

1 霊峰に崩れる

白山　御前峰に立つ
御嶽　野望編 / 逆襲編 / 復讐編
三方崩山　木村さん崩れる

12 近郊の山を縦走する

各務原アルプス　各務原の山々を縦走する
伊吹山北尾根　春の伊吹山北尾根を行く

18 憧れのアルプス第一歩

焼岳　地球のヘソを覗く
笠ヶ岳　新たなる野望

24 絶景と奥深さを味わう

銚子ヶ峰　絶景の頂上 白山への想い
蕎麦粒山　これが登山道か…
霊仙山　これが鈴鹿の山々
横山岳　春の花を求めて
三方岩岳　青空の中の大岩

霊峰に崩れる

白山

御前峰に立つ

平成十八年八月二十六日
大白川登山口～御前峰

大白川口から平瀬道の尾根道を進む。徐々に高木は姿を消し、視界がよい。左手の眼下に白水湖を見下ろすと、登山口からの標高差を感じ取ることができる。室堂はまだまだ遠い。

霊山に挑む

日本の三大霊山と呼ばれる富士山、立山、そして白山。中部地区では白山は古くから信仰の山として馴染みのある山の一つである。思えば登山を始めた最初の年に石徹白から銚子ヶ峰に登ったとき、目の前に見える三ノ峰から下りてくる登山者が背負っている巨大なザックに白山縦走の厳しさを感じた。三ノ峰の右手にそびえる別山。そのまた奥にある白山を見ることはできないが、当時登山を始めたばかりの自分たちにとって白山は「登ることのできない山」だったのだ。

平瀬道から室堂へ

銚子ヶ峰登山から二年後、一度は悪天候により引き返しはしたものの、お盆明けの晴天に大白川ダムにある平瀬道から白山を目指す。大白川登山口への県道は夜間通行止めが続いており、国道からの入り口にはたくさんの車が解除されるのを待っている。定刻に通行止めが解除。前回同様、大白川ダムの登山口へ車を進める。今回もそこそこ登山者は多い。

登山口の避難小屋で登山届けを出し、登山口に設置されている自動カウンターの横を通り、白山の最高峰、御前峰を目指す。

気持ちのいい青空の中、登山口から三キロメートルのポイントに着く。ここから室堂までは三・九キロメートル。右手には三方崩山だろうか、険しい山塊が見え隠れする。しばらく登ると前方に雪渓の残る山が見えてくる。まだまだ先は長い。今まで見えていたブナなどの高木がなくなり、眼下に白水湖を見ながら尾根伝いの道をひたすら登る。

間もなく大倉山避難小屋に到着。ここからはひたすら登りの道が続く。ガスも出てきており、お花畑や大カンクラ雪渓もガスでほとんど見えないほどである。木村さんはちょっとバテてきたようだ。

ガスがなければ大カンクラ雪渓が見える。室堂まではあと 1.2km。更に長い丸太の階段の登りが続く。

厳しい登り。標高 2,000m 近くとはいえ季節は夏。大倉山から一登りしたところで小休止。

眼下には白水湖。平瀬道の出発点で、シーズン中は露天風呂に入ることもできる。

室堂／御前峰

登りが一段落すると右手の山肌にひときわ大きな雪渓が現れる。雪渓の先端からは雪解け水がちょろちょろ流れ出ており、登山道を横切って谷へと続いている。周りはとても静かで水の流れる音だけが聞こえてくる。ガスで見通しが悪い中、彼方に赤い建物がうっすらと見えてきた。七百人を収容できる室堂に到着。ここは福井県や石川県からのルートが集まっており、それ故急に人も多くなる。多くの人は室堂に宿泊したり、ザックを預けて御前峰に向かうようだ。

外のベンチで昼食を取り、御前峰への最後のルートを進む。御前峰へは祈祷殿横から石畳が延びているので、スニーカーの人も多い。約四十分ほどで白山の最高峰、御前峰に着く。

室堂へ向かう途中で雪渓が現れた。溶けた雪解け水が登山道を横切っている。1ヶ月前は登山道は雪に覆われていたそうだ。

石畳を40分ほど登り、石垣を過ぎると白山神社奥社が祀られている御前峰山頂に着く。

石畳を御前峰に向かって登る。平で固い道はこれまで登ってきた登山道と異なり、歩きにくい。

登山シーズン真っ只中なので室堂には宿泊客も多い。人の数からして、平瀬道は静かな道のように思える。

御前峰に立つ

門のような石垣を過ぎると、白山比咩神社奥宮が祀られてあり、そのすぐ先が御前峰頂上である。

眼下にはガスの隙間からわずかに室堂が見えるが、その先の別山は濃いガスに姿を隠している。厳しい行程だったが、古来から畏れ敬われてきた神の山に立つことができたのだ。

ようやく来た白山の最高峰2,702mの御前峰。生憎のガスで遠くは望めないが、歴史ある山に登ることができて満足だ。

お池巡りと火の山

白山は信仰の山であると同時に、火口湖や溶岩柱が見られる火山である。御前峰山頂から室堂とは反対側にはいくつもの火口湖を見ることができ、お池巡りのコースも整備されている。

山頂を後にして火口湖を目指す。周りは至る所に溶岩が点在する異様な世界となり、改めて白山が火山であることを実感する。しばらく平坦な道を進むと御宝庫と呼ばれる巨大な溶岩柱が見えてくる。御宝庫を過ぎて一気に下ると左手に油ヶ池が見えてくる。更にガスが切れて右手に白山の剣ヶ峰が顔を出す。残念ながら剣ヶ峰へはきちんとした登山道は無いようだ。すぐに紺屋ヶ池に着く。名前の如く、藍色の水をたたえた小さな池だが、未だに雪の塊が湖面に残っている。思わず絶句の木村さん。別世界に来たようだ。なぜかあれだけたくさんいた登山者はこちらにはほとんどいない。白山に登ったら是非このコースはお勧めしたい。

少し登ると、今まで見えなかった翠ヶ池と雪渓が現れる。翠ヶ池は火口湖の中でも一番大きな池であり、荒涼とした岩屑の中にひっそりと佇んでいる。

火口湖は大小含めて七つあり、それぞれ特徴ある名前が付けられている。その一つ、血ノ池も不気味な名前であるが、その岸に大きな岩があり、動いた跡が見られる。冬の雪の力でずるずると動いたのだろうか？

見上げると、ガスの隙間から先ほど通った御宝庫が見え、御宝庫を中心に左に回って進んでいることがわかる。

更に進むと万年雪に覆われた千蛇ヶ池に着く。白山を開いた泰澄大師が千匹の悪蛇を封じ込め、雪が融けたときには御宝庫の岩が崩

写真上／御前峰から見下ろした火口湖群。油ヶ池、紺屋ヶ池がガスの切れ目に見える。

写真中／巨大な溶岩柱の御宝庫。この下には千蛇ヶ池がある。

写真下／雪の塊が浮かんだ紺屋ヶ池。静寂の中に佇む火口湖はどれも美しい。

万年雪に覆われた千蛇ヶ池。雪が融けて悪蛇の封印が解けた時には、上方の御宝庫が崩れて池を塞ぐそうだ。

剣ヶ峰を背に進む。約 2,900 年前に噴火してできたといわれており、ここに至る登山道は無い。

れ落ちて池をふさぐようにしたという伝説があるそうだ。実際、地球温暖化で万年雪も融けつつあるそうだが…。

ここから室堂へのルートが延びているが、さらに奥へ向かって進む。五色池、百姓池と小さな池を訪れた後、道は下りになる。ハイマツ帯を左へ巻くように進むと室堂の赤い屋根が見えてくる。その手前にはまたまた大きな雪渓が残っている。人っ子一人いない道。室堂や御前峰のにぎやかさとはまた違った雰囲気だ。

ようやく室堂へ辿り着く。御前峰から一時間二十分の行程。室堂で小休止後、帰路に着く。丸太の下り坂は疲れた足にはかなり堪える。改めて周囲を眺めると、あちこちで崩落箇所が見られる。

無事登山口に到着。山頂付近の溶岩柱や万年雪が浮かぶ火口湖など、日常生活とはかけ離れた世界から戻ってきた。

白山は名前の如く、雪を象徴とする山であるが、遠くから望む白山はいつ見ても美しい。

お池巡りに急なアップダウンはないが、それ故違う世界に迷い込んだのかと感じてしまう。古くから神々の山として崇敬を集めているのもわかるような気がする。

白水湖から室堂まで約六・九キロメートル。初夏でも残雪で登山道が不明瞭になることがあるので、無理をしないこと。ガスが出てきたら要注意。

白水湖まではよく通行止めになるため、事前に調べておくと良い。

御嶽

野望編

平成十八年九月三十日
濁河温泉登山口～サイノ河原

霊山に挑む

「木曽のおんたけさん」で馴染み深い御嶽。晴れていれば自宅付近からもよく見えるほど身近な山なのだが、まさかこの頂を目指すことになるとは。白山登頂の次は、これまた信仰の山と火山で白山と共通点のある御嶽の剣ヶ峰を目指すことにしたのである。しかし何といっても今度は国内第十四位の高峰で、高さは三千メートル超。若干の不安と余裕を抱き、登山届を出して目の前の草木谷にかかる嶽橋を渡る。登山道をしばらく歩くと仙人橋。ここから傾斜もきつくなり、本格的な登山となる。途中、ジョーズ岩や蛙岩といった奇岩が現れる中、苔むした道をひたすら登ると、お助け水と呼ばれるの八合目に着く。

小休止後、岩がゴロゴロする道を登っていくと周辺の景色が一変する。森林限界に出たのだ。一気に開けた視界の向こうには白山や笠ヶ岳がはっきりと見える。しかしここからがキツイ。木村さんもかなりバテバテになったが、何とか飛騨頂上に到着する。

祠の周辺を歩いてみると眼下には三ノ池。神の水と言われるほど見事だ。しかし今日の目標は最高峰の剣ヶ峰。木村さんと先を急ぐ。

サイノ河原に散る

サイノ河原避難小屋からサイノ河原へ下りる。辺りは石を積み上げた無数の仏塔があり、ここだけ異様な空間にも感じられる。木村さんの様子がおかしい。バテてしまったのだろうか、そのまま座り込んでしまった。無理をしてもいけないのでここでザックを下ろす。仰向けで休むこと一時間。何とか立ち上がった木村さんであるが、今日はこれで引き返すことにする。

木村さんによれば急に息切れがし、体が動かなくなったようである。高山病かどうかはわからないが、悔いの残る撤退となった。

三ノ池をバックに剣ヶ峰を目指す。典型的な火山湖である三の池の水は御神水と呼ばれ、腐る事のない神秘の水と言われている。

▶ようやく辿り着いた飛騨頂上。標高二，七八〇mに祠が祀られている。

復活したが今日はこれで引き返し。背後には目指した剣ヶ峰が見える。これも御嶽の試練か？

五ノ池と五ノ池小屋。春雪が解けると直径30mほどの池ができるそうだが、今回はわずかに水が残るのみ。

逆襲編

平成十八年十月十四日
濁河温泉登山口～二ノ池小屋手前

一週間前の吹雪

木村さんが御嶽剣ヶ峰を撤退してから一週間後の連休、山に関わる事件があった。冬型の気圧配置により北アルプスをはじめとした山岳地が降雪に見舞われ、各地で登山者が行動不能に陥り遭難、死亡事故が起きたのである。

改めて山の怖さを知るところとなるのだが、前回の撤退が余程悔しかった木村さんはその一週間後にリベンジで再度チャレンジすることになったのである。しかしこれらの遭難事故のことを知り、無理はしないということを改めて頭の中に入れておくことにする。

ルートは前回と同じ小坂口から飛騨頂上を経由して剣ヶ峰を目指す。天気は気温も前回より低く、日射しもさほど強くはないので、順調な登山が続く。飛騨頂上の周辺を眺めると、山肌には所々うっすらと雪が積もっている。やはり一週間前の低気圧はこの御嶽にも積雪をもたらしたようだ。かといって現在はアイゼンを装着するような積雪量はない。飛騨頂上からサイノ河原避難小屋に向かう。

避難小屋からサイノ河原を横断する。今回は無事通過できたようだ。ここから次の目標地である二ノ池小屋に向けて岩場を登る。振り返るとサイノ河原避難小屋が小さく見える。木村さんは…ちょっときついようだ。

再び止まる足

岩を登り切ったとき、突然木村さんが崩れるように座り込んでしまった。何とか立ち上がって進もうとするが、次の一歩がでない。何とか小屋で休憩をと思ったが、全く先へ進めなくなってしまった。

木村さんの体調を考え、近くの岩で休ませることにする。更にガスが出てきて気温も低くなってきたので、レインウェアを着させる。まさか新調したレインウェアがこのような状況で着ることになるとは…。

約一時間強、何とか木村さんの体調も落ち着いたようだが、お昼を過ぎてしまったので、今回もここで引き返すことにする。何事も無理はいけない。残念がる木村さんだが、またチャレンジすればいいことだ。

五ノ池小屋は本日でもって今シーズンの営業は終了。我々にとって御嶽はもう登れないシーズンに入る。

うっすら雪を被ったサイノ河原から剣ヶ峰。一週間前の低気圧は御嶽にも雪をもたらしたようだ。

サイノ河原は無事通過したのだが、二ノ池小屋手前で再度ダウン。サイノ河原から上る時点で既に苦しかったようだ。

体温を保つためにレインウェアを着て下山する。剣ヶ峰への登頂は来年に持ち越すことに。

復讐編

平成十九年六月二十三日
濁河温泉登山口～剣ヶ峰

木村さん三度目のトライ。ハイマツ帯のジグザグ路を振り返ると、眼下には雲海の下に御嶽の裾野が広がる。今日こそは剣ヶ峰まで辿り着けるだろうか。

残雪の霊峰

昨年の二度の撤退にすっかり気を落としていたと思ったら、チャレンジ満々の木村さんである。時期は六月下旬。できれば梅雨明けにしたかったのだが、梅雨の合間の天気を狙い、三度目のトライを敢行することにした。

しかし白山を登ったときには何ともなかった木村さんがなぜか御嶽では二度も倒れている。余程相性が悪いのだろう。登山口の御嶽神社で手を合わせて登山の無事を祈る。

八合目のお助け水まではいつものとおり順調な行程である。しかし森林限界に出ると登山道には所々に残雪が横たわり、雪解け水も流れているので足下は滑りやすくなっている。ルートを横切る雪渓の谷川に張られている滑落防止のロープが緊張感を増す。改めて周辺を見渡すと雪を被った笠ヶ岳が見事なまでに青空に映っている。これまでの登山の中でも初めて見る絶景だ。

このルートで最も厳しいところが最後のジグザグ。力を振り絞りながら飛騨頂上に到着する。遠くに見える白山がとても綺麗だ。三ノ池は表面に雪と氷を貯えており、昨年見たときよりも一層神秘的になっている。

しばらく周辺の景色を楽しんだ後に、剣ヶ峰に向けて出発する。息切れしているが、木村さんも大丈夫なようだ。しかし行く手を雪渓が遮っている。ここは一旦、摩利支天への分岐である乗越へ登り、そこからサイノ河原避難小屋へと下りていく。少し遠回りになるが、雪渓を横断するような危険なことはできない。

無事避難小屋まで来たが、またまた木村さんの様子がおかしい。いきなり避難小屋で仰向けになる。やはり今回も撤退になるのだろうか。休憩すること十五分。木村さんが小屋から出てきた。

ギブアップ寸前

避難小屋からサイノ河原へ下りていく。ここにも雪が多く残っており、時折足が埋もれてしまう。難なくサイノ河原を過ぎ、積雪の中、岩を登ると前回調子が

飛騨頂上で座り込む木村さん。遠くには雲から白山が顔を覗かせている。

雪と氷の中の三ノ池。三千メートル近い標高では六月でもまだまだ冬の光景である。

飛騨の名峰笠ヶ岳をバックに雪渓を横断する。午前中は凍っていて非常に危険だ。

悪くなった地点だ。ここも難なくクリア。しかしちょっとガスが出てきたのが気になる。ルートは二ノ池本館から東回りで剣ヶ峰を目指す。しかし前方の二ノ池本館の手前には大きな雪渓が横たわる。歩行可能なルートを選んで進んでいき、二ノ池本館に到着する。

二ノ池の中の雪はほとんど融けている。ここでも小休止。前回、前々回のことを思えば、よくここまで来ることができたと感激する木村さんだ。後から聞いたのだが、ここ二ノ池でほとんど体力が限界だったようだ。

剣ヶ峰まではあと少し。二ノ池湖畔を出発するが、標識の指す方向はこれまた雪に埋もれている。ここは迂回することとし、御嶽ロープウェイからの黒沢口登山道方面へ進む。

どうも木村さんの様子がおかしい。急に携帯に電話が入る（御嶽山頂は携帯電話が通じるようだ）。「ギブアップ寸前」の電話だ。

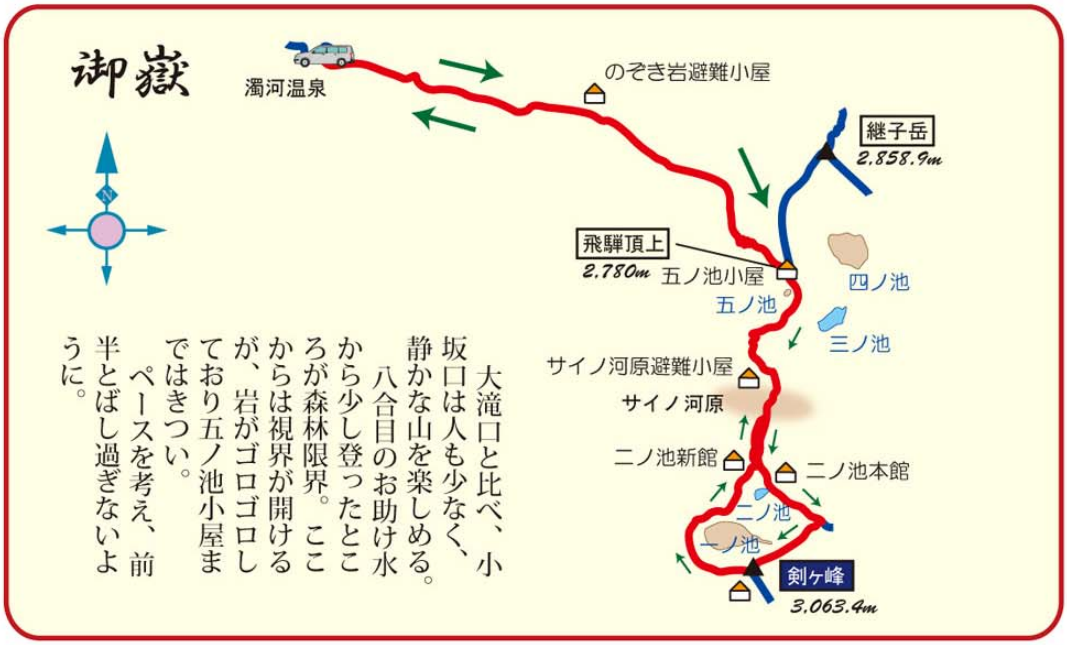
二ノ池湖畔に立つ。剣ヶ峰はもう目の前だ。しかしこの時点でかなり体力が消耗していたようだ。背後の山々にはまだ多くの雪が積もっている。

後方を見ると完全に足が止まってしまい、座り込んでいる。とりあえず、せっかくここまで来たので、十分休んでぼちぼち来るように告げる。

木村さんの元へ駆け寄ると、何とか立ち上がり、先へ一歩ずつ歩き出す。フラフラになりながらもようやく剣ヶ峰に立つ木村さん。山頂からは二ノ池と水のない一ノ池が眼下に見える。三度目のチャレンジにしてようやく目標達成した。

独立峰の御嶽は非常に奥深い山である。太古から信仰の山として多くの登山者を受け入れてきた。御嶽登山は厳しいが、登るたびに神々の暖かさを感じる山でもある。だから何度登っても楽しい。

ようやく標高 3,064m の剣ヶ峰に辿り着いた。眼下には雪解け水の流れる一ノ池、鮮やかな二ノ池が見える。三度にしてようやく野望が叶った。



大滝口と比べ、小坂口は人も少なく、静かな山を楽しめる。

八合目のお助け水から少し登ったところが森林限界。ここからは視界が開けるが、岩がゴロゴロしており五ノ池小屋まではきつい。

ペースを考え、前半とばし過ぎないように。

三方崩山

木村さん崩れる

平成十七年九月十日

三方崩山の名の如く白くガレた谷。地質が脆いのか、至る所で崩落が見られる。登山道は右手奥の縁を辿るように延びている。

「崩れている」山

名は体を表すと言うが、これをこのまま当てはめると「三方が崩れている山」である。何とインパクトのある山名であろうか。

ここは世界遺産となった白川郷より南、平瀬の集落。ここから西側に延びる林道奥に登山道はある。荒れた林道は一般車では奥まで入っていけないため、途中で車を乗り捨てて登山道まで歩く。登山口には「頂上まで4.8km」と書かれている標識がある。厳しい山と聞いてはいるが、山頂までどれくらいかかるのだろうか。

四等三角点から厳しい直登が続く。辺りは見事なブナ林なのだが、雰囲気を味わう状況ではない。

登山口からは灌木と雑草の茂る急坂をひたすら登っていく。しばらくすると辺りはブナの木に覆われてくる。さぞかし秋は紅葉で綺麗だと思われるが、そんなことを考えている場合ではない。傾斜はどんどんきつくなってきているのだ。後々のことを考えて、ペースは控えめにする。しかし湿気と気温がどんどん上がり、バテ気味になってきた。

間もなく最初の目標地である四等三角点に到着。「三角点をたいせつにしましょう」の標識が倒れている。

崩落した谷の上部に登山道が続いている。ここから山頂が見えるそうだが、あいにく谷からガスが上ってきた。

ここからがこの山の本領発揮である。登山道はこれまで以上の直登となる。所々に張られたトラロープに助けられながらひたすら登っていくと傾斜が緩やかになる。その目の前に現れた光景は深く切れ渡った谷である。登山道は谷の上部の縁を沿うように延びており、まさに「崩山」の名の如く崩落している。

木村さんは無言で腰を下ろしている。しかしこの先、ルートはこれまでにも増して厳しくなっていくのであった。

目の前に現れたナイフリッジ。ルートの幅は 50cm 程度で片側は谷に向かって崩れ落ちている。

アップダウンを繰り返し、いくつものピークを越える。所々にロープは設置されているが、厳しい行程だ。

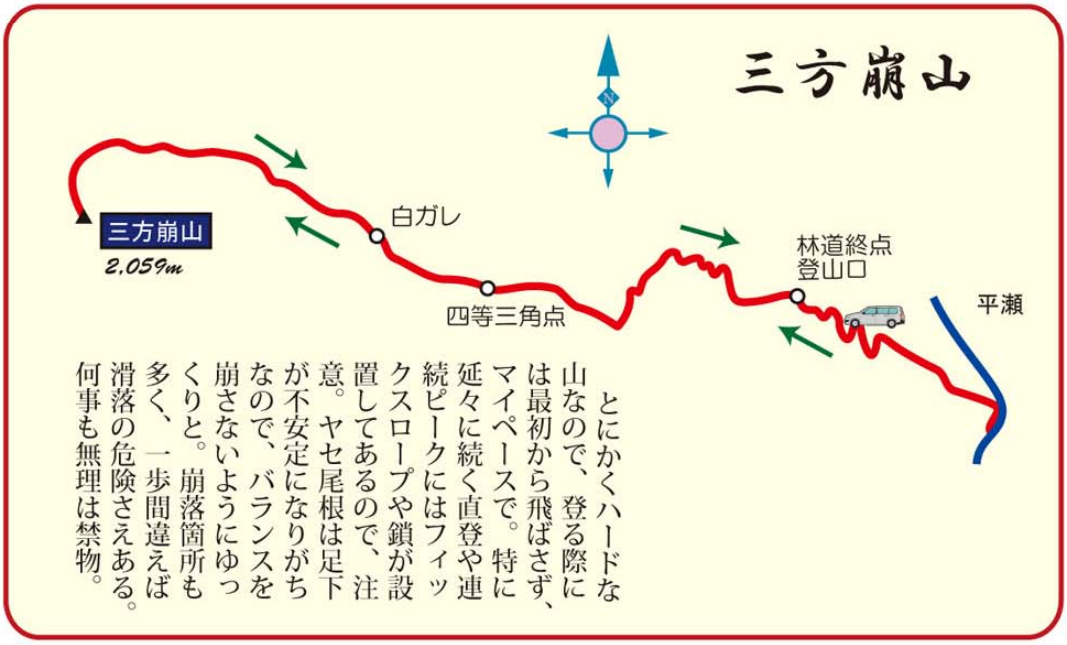
ナイフリッジ

再度山頂へ向けて出発する。しかしここからは登って下りて、登って下りてを繰り返す厳しいルートになる。急坂にはフィックスロープや鎖が張られているが、アップダウンの連続に息が切れる。一つピークを越えると眼前には更なるピークが…。大きなピークを越えた先にある壁と鎖を見たときは思わずヒザから崩れ落ちてしまったくらいだ。果たして頂上まで辿り着けるのだろうか。

今回同行したトモちゃんは既に先へ行ってしまった。後ろを振り返ると木村さんがはるか後方で立ちすくんでいるのが小さく見える。どうやら足が止まってしまったようだ。しばらく様子を見ていたが、木村さんが動き出したのを確認して先へ進む。すると急に道がなくなった。いや、道はあるのだが、鎖が設けられた崖になっており、その先は両側が切れ渡った、まるでナイフの刃の上を登山道が走っている。ここは鎖を頼りに不安定な足下に注意しながら慎重に下っていく。まさに「崩山」の名のとおり。この山は至る所で崩落があり、かろうじて登山道は確保されているが、特に疲労でバランスを崩すと滑落の危険性もあるので、細心の注意が必要である。

ロープを辿りながら崖を下る。かなり疲れが溜まっているようだ。

フラフラになりながらも何とか到着した三方崩山の頂上。標高 2,000m 強とはいえ、崩落地や連続ピークを繰り返すルートは極めて体力と技術を要する山だ。



とにかくハードな山なので、登る際には最初から飛ばさず、マイペースで。特に延々に続く直登や連続ピークにはフィックスロープや鎖が設置してあるので、注意。ヤセ尾根は足下が不安定になりがちなので、バランスを崩さないようにゆっくりと。崩落箇所も多く、一歩間違えば滑落の危険さえある。何事も無理は禁物。

「人も崩れる」山

これほどバテてしまった木村さんを見るのは初めてだ。何度も足が止まりながら休憩を挟み、崖や崩落地を乗り越えて、何とか山頂へ到着する。周辺は灌木とガスに囲まれ、見通しは悪い。先に到着していたトモちゃんも連続ピークには相当参っていたようだ。

ここで昼食とするが、木村さんは弁当も喉を通らない。

苦労して登ったものの、山は下山しなくてはならない。手にマメを作りながら何とか根性で下ってきた木村さんであったが、四等三角点で遂に崩れてしまう。

その後、休憩を取りつつも無事登山口に着く。疲労困憊で林道を歩く木村さんにカメラを向けると、その顔はいつもの達成感から来る笑顔とは打って変わり、ほとんど無表情だ。それほど今回は厳しい山行だったのである。

往きで下った崖を登る。木村さんの後方は切り立った崖。一瞬の気の緩みが命取りとなる。

崩れてしまった木村さん。やはり厳しい山なのだ。この後、無事下山する。

近郊の山を縦走する

各務原アルプス

各務原の山々を縦走する

平成十九年一月二十日
坂祝～岩坂峠手前

猿啄城から縦走路は続く。背後には坂祝町、美濃加茂市の街並みや木曽川が見える。木曽川の対岸の山は鳩吹山。

ハイキングコース

元旦に迫間不動へ参拝に行ったとき、東西に続く稜線に登山道があるのを見つけた。よくよく調べてみると、東は坂祝から、西へは桐谷坂を経て蘇原の方まで続いているらしい。約三五〇メートルほどの山々が連なる丘陵地帯は「各務原アルプス」という名で多くの地元の人に親しまれ、気軽にかつ自由にコースを選ぶことのできる人気のあるコースである。

年明け早々のチャレンジは坂祝の猿啄城跡の城山から西へと縦走を試みる。本来だったら蘇原まで一気に行きたいところだが、近郊の低山とはいえ、アップダウンの繰り返しはかなりきつそうだ。今回は行けるところまで行き、途中でUターンして戻るピストンとする。

登山口手前に十台ほどの駐車スペースがあり、しばらく歩くと左手に城山への登山口が現れる。ここからは植林帯の中、適度な斜度の登山道を登る。鉄塔まで登り切ると視界が開け、眼下に国道二十一号線、木曽川、坂祝の町並みを望むことができる。天気は曇り。晴れていれば遠くまで見渡せそうだ。

ここのルートは所々に絶景ポイントがある。最初は明王山見晴台。迫間不動を経て迫間城跡のある迫間山。もう少し頑張って西へ進むと大岩見晴台に到達する。その先は山頂に反射板のある金山。いずれも北は御嶽、乗鞍岳、南は遠くに名古屋の街並みや伊勢湾が見える。

反射板を過ぎたところでタイムアップ。比較的ノンビリの山行であったが、これらの山々、奥が深そうだ。

東西に続く稜線伝いの登山道は軽いアップダウンでもだんだんと疲れてくるが、各見晴台ではその疲れも吹き飛ぶほど絶景だ。

平成十九年三月十七日
大岩不動～桐谷坂

桐谷坂を目指す

寒い冬もそろそろ終わろうとしている。年明けに坂祝の猿啄城跡から迫間不動、大岩見晴台を経て岩坂峠手前まで走破した各務原アルプスであるが、今回全ルートの一部として大岩不動から大岩見晴台に登り、そこから桐谷坂へ向かう。

大岩不動のちょっと奥に小さな広場がある。今回はここに駐車したが、悪路のため大岩不動の駐車場に停めた方がよさそうだ。前回と異なり、今日は絶好の天気なので、遠くの景色が期待できるかもしれない。

大岩見晴台へのルートは多少岩場もあり荒れているが、ちょっと険しいハイキングコースといったところか。これなら登山初心者でも安心して登ることができる。

三十分も経たないうちに大岩見晴台に到着する。見晴台からは三百六十度遠くまで見渡すことができ、周辺には馬酔木の花も咲いている。もう山は春のようだ。ここから前回のルートを辿り、桐谷坂へ向かう。

軽くアップダウンを繰り返すと、目の前に大きな反射板が現れる。前回も訪れた金山の反射板は周辺の道を車で走っていても必ず目に飛び込んでくることから、ここからの眺めも良い。

しかしここはまだ通過点。前回引き返した箇所を過ぎると岩場が多くなってくる。岩坂峠へ下りていく急坂に差し掛かるところでは、眼下の県道を挟んで西に連なる山々が見えてくる。足元の悪い急坂を下ると間もなく岩坂峠。この先は向山へのルートと岩坂トンネルへ下りていくルートに分かれている。

アップダウン

岩坂峠から一登りすると送電線の鉄塔が建つピーク。ここからはアップダウンの繰り返しとなるが、標高差はさほど無い。須衛山を過ぎると、今回のルートで最も急な坂となる。木村さんもアップダウンの連続に疲れてきたところでこの急登はさすがにこたえたようだ。この先は向山見晴台、向山とまだまだ起伏が続くため、ペースを守らないと近郊の山とはいえ、すぐにバテてしまう。

静かな山頂を過ぎると道は緩やかな下りと

向山見晴台。天気が良ければ遠くは南に伊勢湾、北に槍ヶ岳を望むことができる。ニューヨーク、パリ、ロンドンなどの距離が書かれているのも面白い。

季節は初春とはいえまだまだ寒いが、あと少しで見事なまでの新緑の季節を迎える。

満開の馬酔木の花。各務原アルプスは花を楽しみながら歩くこともできる。

桐谷坂を通る県道 17 号線。車が頻繁に通っており、ルート上最も危険な箇所かもしれない。

なってくる。桐谷坂への下りのようだ。しばらく進むと車の走る音が聞こえてくる。更に落ち葉が敷き詰められた中を進むと、桐谷坂の峠の北側の登山口に出る。いつも車で通る道を歩いているのはちょっと変な感じがしてしまう。

この各務原アルプスは、桐谷坂からこの先岐阜市方面へまだまだ登山道が延びている。中には一日かけて全コースを走破する者もいるとか。このルートはメインだけでなく、枝道も多く、場所によっては岩場が乱立するバリエーションルートもあるとのことで、初級者から上級者まで楽しめそうだ。

今日は我々はこれで終わりだが、来た道を引き返さなくてはならない。木村さんもちょっとため息。次回はこの向こうのルートを攻めてみようか。

平成二十年一月二十六日
伊吹の滝～桐谷坂

山火事の跡

平成十四年四月五日、湿度が六％と極端に低かったこの日に岐阜市東部にある権現山一帯で大規模な林野火災が発生した。強風にあおられ、この林野火災の被害面積は東京ドーム約八十七個分に相当する、約四百十ヘクタールと、岐阜県での過去最大規模の林野火災となった。

坂祝から桐谷坂まで走破した各務原アルプスであるが、最後に各務原の蘇原から各務原権現山、岐阜権現山（芥見権現山）を経て桐谷坂へ通じるルートにチャレンジする。今回のルートはかつて林野火災が起こった地であり、この先、火災の跡や山の復旧活動の取り組みを目の当たりにする登山となる。

登山口は住宅地に近い伊吹の滝にあるため、早朝にもかかわらず、多くの人が登っている。

わらび道から下りると「どんぐり山」の看板が立っている。山を再生したいという岐阜県民の願いが込められているのだ。

各務原権現山を伊吹の滝から登る。平成14年4月に大規模な山火事が起こったが、山はかつての姿を取り戻しつつある。

岐阜権現山から北山へ登る直登ルート。ロープが設置されているが、下るのも厳しそうだ。ここら一帯は枝道が多く、場所によっては危険なルートもあるため注意を要する。

山の再生を願って

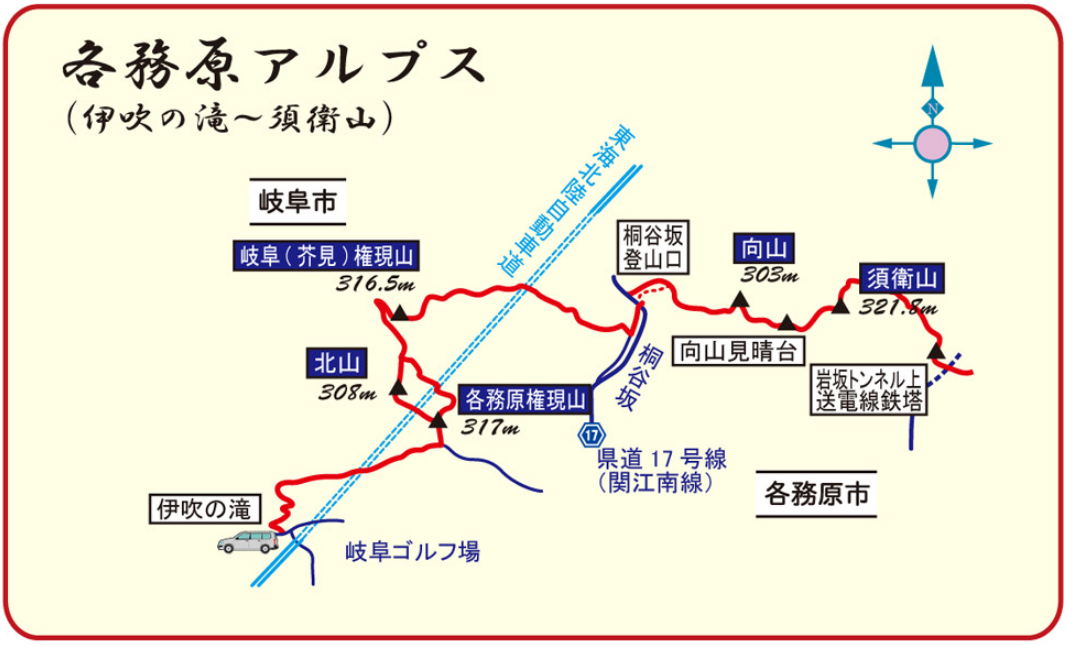
朝陽が昇ってきた。登山道を登っていくと、所々に枯れた、いや、火災で焼け焦げた木々が立っている。鳥居の立つ権現山への直登を進むと、東屋のある各務原権現山に到着する。地元の方が苦労して再生に取り組んだとみえて、周囲には山火事注意の看板が至る所に立っている。

ここから「わらび道」と呼ばれるルートを下りていくと、「どんぐり山」と書かれた真新しい看板に出会う。火災後、ボランティア団体、企業、一般県民は「緑の再生プロジェクト」として植樹活動など懸命に取組んできた。その再生活動を行ってきた現場の愛称を公募し、「どんぐり山」と名付けたそうだ。

炭化した立木。焼け跡が生々しい。

岐阜権現山へ登り返す。周辺は荒々しい岩が切り立っている。緩いアップダウンを繰り返しながら最後の坂を下ると、桐谷坂の旧道に出る。「これでつながった。」木村さんが感慨深げにつぶやく。三回に分けて走破した各務原アルプスであるが、改めてこんな近場にこんなに変化に富んだロングコースがあることに驚かされる。初心者のハイキングコースのようにも思われるが、場所によってはベテランでも苦労するエキサイティングなコースだ。

この登山の後、また山火事が発生した。地質調査の作業員の吸っていたタバコの火が落ちて枯れ葉に燃え広がったそうだ。登山者に限らず、山に入る前にあの忌まわしい火災を思い出してほしい。人々が苦労して築き上げたものを一瞬で壊してはいけないのだ。



伊吹山北尾根

春の伊吹山北尾根を行く

平成二十一年五月二日

国見峠～伊吹山ドライブウェイ

国見岳から伊吹山へ向かって尾根伝いに南下する。周りには高い木もなく、見晴らしもいい。一年を通して最も気持ちよく、花も綺麗なこの季節は登山者も多い。

大型連休の真っ只中

季節は春、というよりも大型連休に入った今は初夏と言いたいところだが、高い山はまだまだ初春の様相だ。暖かくなり木村さんの腰の調子もだいぶ良くなってきた。それではポカポカ陽気を楽しもうということで、以前から木村さんが登ってみたかった伊吹山の北、国見岳に行くことにする。国見岳は伊吹山の北尾根に位置し、大禿山、御座峰を経て伊吹山へ通じる北尾根ルートとして人気のあるコースである。伊吹山は花の山としても有名であり、春には多くの登山者が集まるが、この北尾根ルートも所々にカタクリの群生地があるため、駐車場である国見峠は停めるところが無いほどである。

天気は絶好の晴れ。国見峠からしばらくは樹林帯の中のなだらかな上りが続くが、次第に不安定な岩がゴロゴロした急斜面になってくる。ここを登り切ると国見岳。ここからは背の高い木々も姿を消し、快適な尾根歩きが始まる。

国見岳からしばらく緩やかなアップダウンを繰り返すと、大禿山に着く。今回のルートの中ではここが最も景色がいいところだろう。あいにく春霞で遠くまでは望めないが、運が良ければ北アルプスの山々も見ることができる。ここから国見岳まで一・五キロメートル、伊吹山まで一・五キロメートルと書かれてあるので、まさに北尾根ルートの中間点である。

何といっても周りの景色が素晴らしい。途中で木村さんがカタクリの花を見つけた。この先、どんな花に出あうことができるのか楽しみだ。大禿山から約三十分、御座峰に到着する。ここには三角点が埋め込まれており、大垣山岳協会が設置した伊吹山北尾根縦走路の説明板がある。先人達がきちんと整備してくれたお陰で登山が楽しめるのだ。

花の山の現状

御座峰から延々と延びる登山道。それほど

新緑の季節は木々が息を吹き返しているようであり、生命の活力を感じることができる。
国見岳からの下り。ここから高い木々は姿を消していく。（右）／尾根を南下していくと伊吹山が見えてくる。（中）
国見岳～大禿山～御座峰と縦走してきた。暖かくなると体が動く反面、喉も渇く。（左）

ここは花の山。カタクリやヤマネコノメソウが群生しており、カメラ片手に多くの登山者が集まる。登山ルートから外れたところにむやみに立ち入るのは避けたいものだ。

国見岳から下山する。山頂直下は急な岩場。北斜面のため、春先は凍結していることもあるので要注意。

アップダウンもきつくなく、ひたすら前方に見える伊吹山を目指して進む。しばらくすると車の音が聞こえてくる。ゴールデンウィークなのでもっと混んでいると思ったが、みんな千円高速道路に行ったようだ。

徐々に前方から擦れちがう登山者も増えてくると、目の前にドライブウェイの駐車場が見えてくる。ここを下って登り返せばドライブウェイ。先に駐車場で待っていると木村さんも追いついてくる。

まだまだ伊吹山山頂は先だ。辺りを見回すと「道路内は歩行禁止です」の看板が。さすがに自動車専用道路を歩くのも危ないので、今日はここで引き返すことにする。

同じ月に国見峠から国見岳と逆方向の虎子山（とらすやま）に登ったが、駐車場は満車どころか、ツアーの観光バスまで入ってくる始末だ。既にこの季節になると虫も多い。三月に下見で一度訪れたことがあるが、それは静かな山だった。混雑が嫌いな人は花咲く前の季節に登るのもいいかもしれない。また、御座峰までにはカタクリが群生している所があるが、群生地の中に踏み跡が続いているところが何カ所かある。誰かがむやみ立ち入ると、後に続くものが出てくる。これだけの群生地を今後も守っていきたいものだ。

伊吹山北尾根
（国見峠～伊吹山ドライブウェイ）

国見岳から伊吹山ドライブウェイまでは快適な尾根の縦走路。むやみにルートを外れたり、花を摘んだりするのはやめよう。

国見岳から国見峠への下りは急な岩場があるので、春先の凍結には注意。

憧れのアルプス第一歩

焼岳

地球のヘソを覗く

平成十七年八月二十七日
中尾温泉登山口〜焼岳北峰

中尾峠から山頂へ進むと不気味な溶岩ドームが見えてくる。未だ山頂付近では岩の間から水蒸気が噴出し、いつ火山活動が起きてもおかしくない。

炎の山

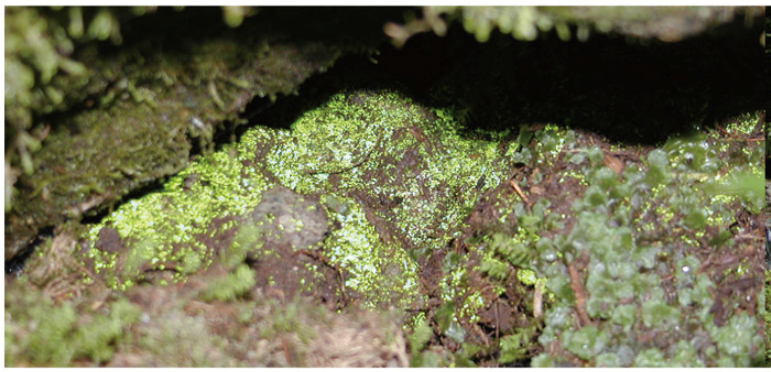
北アルプス南部といえばやはり槍・穂高だろうが、登山を始めたばかりでは経験も技術も足りず、いきなり欲張ってもいけない。しかし将来は山小屋で泊まりながら山々を縦走してみたいものだ。北アルプスの中でも比較的初級者でも登ることができ、かつ日帰り可能な山の一つが焼岳だ。焼岳は西穂高岳からの主稜線上にあり、日本百名山にも選定されている。

ご存じのように北アルプスの山々の中でもちょっと特殊なのは、未だ水蒸気がものすごい勢いで吹き出している活火山であり、地球の営みを直に感じることができることである。大正四年に起きた大爆発では、泥流が梓川をせき止め堰止湖ができた。これが上高地で観光地になっている大正池である。最後に大爆発が起こったのは昭和三十七年。一部規制が緩和されたものの、北峰への立入が許可されたのは平成に入ってからのことである。

明らかにこれまでに登った山とは違う。焼岳には複数のルートがあるが、今回は比較的登山者も少なくて静かな中尾温泉からのルートから登る。木村さんの北アルプスへの第一歩だ。

逃避行の道

中尾温泉はあいにくの悪天候。地元の人曰く、山頂は雨とのことだ。登山口からしばらく歩き、沢を渡ると本格的な登山道になる。辺りはガスのお陰で見通しは悪いが、晴れていれば雰囲気のいい静かな森の中を登ることになるのだろう。一時間ほど経っただろうか、木村さんが何かを見つけた。岩の間に金緑色に光るものが見える。何とヒカリゴケであった。環境省のレッドリスト（二〇〇七年版）では準絶滅危惧に位置づけられている。珍しいものに出会ったことで元気も出てくる。さらに一時間ほど登ると鳥居が見えてくる。こ



写真右／登山口から沢を渡る。
写真左／岩の間に見つけたヒカリゴケ。美しいエメラルド色の光を発している。

溶岩ドームを左に巻くと北峰への鞍部に出る。雲はまだまだ多いが天気も回復してきた。辺りは硫黄臭が漂っている。

こはかつて飛騨を支配していた姉小路秀綱に由来する秀綱神社だ。豊臣秀吉が飛騨に侵攻し、城を捨てて信濃方面に逃走したが途中で落ち武者狩りの農民に殺害されてしまう。しかし秀綱を襲った農民達が狂死する事件が起き、霊を鎮めようと祠を祀ったのがこの神社である。なぜこんな山奥に神社があるのか不思議だったが、かつては秀綱が逃避行に歩いた道だったのだ。そんな歴史の一端に触れながら先へ進むと、急に立木が少なくなり、辺りは溶岩がむき出しになった光景に変化していく。ようやく活火山に登っていると感じられるようになってきた。

地球の息吹

道が平坦になると中尾峠だ。ここからは眼下に上高地を望むことができる。ここは西穂高岳や上高地からのルートが合流するところであり、登山者も急に多くなってくる。あとはここを登るだけだが、山頂はガスで全く見えない。砂礫で足下の悪い中を進んでいくと、「危険地域」の看板が立っている。岩のペンキマークを追いながら登る木村さんが立ち止まる。山頂方面に現れたものは迫力ある溶岩ドームの姿であった。「な、なんだあれ？」思わず絶句の木村さん。ルートは溶岩ドームを左へ巻くように続いている。

どうやら北峰への鞍部に到着したようだ。先ほどよりもガスは晴れてきたが、上方で何やら吹き出す音がしている。岩と岩の間から水蒸気が噴出している音だ。やはり焼岳は生きているのだ。地球の奥深くから湧きだしてくる圧倒的なパワーをもらい、山頂は目の前。

北峰直下では至る所で水蒸気の噴出が見られ、周辺の岩は硫黄が溜まって黄色くなっている。噴出する音もすさまじく、改めて焼岳の火山活動を思い知らされる。

山頂にある火口湖。エメラルドグリーンのこの湖は正賀池と名前が付けられている。

焼岳の最高峰である南峰。崩落が激しいため、立入禁止となっている。

地球のヘソ

北峰に到着した。ここから西穂高岳が見えるはずなのだが、今日は雲がかかっている。最高峰である南峰は有毒ガスと崩落で立入禁止。この南峰と北峰の間に火口湖と噴火口が見える。火口湖はエメラルドグリーンのきれいな湖で、ここが活火山の山頂であることを忘れてしまうほどだ。その横にはマグマが急激に冷えて固まったであろう、溶岩の壁に囲まれた巨大な噴火口がある。身を乗り出して覗いてみるが、底が見えない。

木村さんが石を投げ入れる。「カーン、カーン、カン、カン、カン…」いつまでも音が響いている。

「凄いところだ…。」

まるでここは地球のヘソである。地球の鼓動を直接感じた木村さんであった。

噴火口を覗く。どこまで続いているのだろうか。北峰の火口壁からはものすごい勢いで火山ガスが噴出している。

焼岳

日本でも有数の活火山であるため、登山の際には噴火警戒レベル（気象庁）等を調べておくこと。

中尾峠から山頂までは砂礫と溶岩で登りにくいほか、火山ガスにも注意。危険地域には立ち入らないように。

笠ヶ岳

新たなる野望

平成十九年八月十八日
新穂高温泉～笠ヶ岳

左俣谷の林道から笠新道を登る。厳しい急坂は北アルプス三大急登の一つであるせいか、槍穂高と比べて登るものは少ないといわれている。

日帰り敢行

思えば日本アルプスなんて夢のまた夢。ゼロから手探りで登山を始めた我々にとっては登ることなんてほとんど無理、というよりも登る機会も縁も無いと思っていたのだが、経験を積み、遠くから見るアルプスの山々を見ると、いつかはあの頂きに立ちたいという思いはどんどん膨らんでくる。しかし、経験も体力もまだまだ足りなく、しばらくは頭の中からは離れていたところ、白山、御嶽と次々に山頂に立ち、もしかしたら我々でも可能なのではないか？と、いてもたってもいられず、木村さんとやってきたのは飛騨の名峰笠ヶ岳。とうとう本格的に北アルプスにチャレンジすることとなった。

ルートは新穂高温泉から林道を一時間ほど歩き、笠新道の急坂をひたすら登って頂上を目指す。しかも日帰りで。所要時間は登山口から山頂まで7時間ほどになるだろうか。笠新道は北アルプス三大急登の一つで、厳しいルートで有名なので、体調に合わせて行けるところまでにする。時刻は朝の三時半。新穂高温泉の市営駐車場からヘッデンを付けて出発する。果たして無事に山頂に立ち、帰ってこられるだろうか。

笠新道の朝

真っ暗な林道を歩くこと約一時間。徐々に空が明けてきた。中崎橋を渡り、荷物搬送用のヘリコプターを過ぎると、左手に笠新道の登山口が見えてくる。出発は丁度五時。樹林帯の登山道をジグザグに登っていくが、周囲は木々に囲まれ見通しは良くない。来た道を振り返るとあっという間に高度が上がっていくのがわかる。

徐々に陽も昇り、暑くなってきた。木村さんはマイペースを守ってまだまだ余裕だが、今日は日帰りの行程なので、長めの休憩は禁物とする。こまめに休みを取りながら更に高度を上げていくと、木々の間から他の山の姿も見えてきた。

杓子平に到着した木村さん。しかし往きの行程はまだ半分も来ていない。

これまでの景色から一転して、杓子平の広大なカール地形が広がる。

杓子平までの登山道には所々にガレ場もある。落石を起こさないように注意。

杓子平から上り続け、ようやく稜線に辿り着く。すぐ先で双六だけからのルートと合流する。

南東には朝日に照らされる焼岳がはっきりと見えてくる。どうやら新穂高ロープウェイも動き出したようだ。谷を挟んで穂高連峰。槍ヶ岳はすぐに雲の中に隠れてしまった。汗でびしょびしょになりながら必死で昇り続けると、標高一，九百二十メートルの看板がある。どうやらここが登山口から杓子平までの中間点のようだ。道は更に険しくなり、所々では瓦礫の上を進む箇所も現れてくる。さすが険しい笠新道と思いつつもひたすら進むとようやく登り切った先に小さな広場と看板が現れた。杓子平に到着したのだ。時計を見ると、登山口から約三時間四十分かかった。目の前にはこれまでの景色とは変わり、広大なカール地形が広がっている。正面の山にはガスの隙間から雪渓が見え隠れしている。

主稜線から山頂へ

十五分ほど休憩してから再出発。このカールを登り、抜戸岳から続く主稜線に出れば笠ヶ岳山頂まで見通しが付くだろう。しかし杓子平までかなり体力を使った体にはこの上りは限りなくきつい。振り返ると、木村さんがどんどん遅れてくる。

ペンキマークを追いながらひたすらジグザグに登っていくと、笠ヶ岳と抜戸岳、双六岳との分岐に到着する。ようやく木村さんも辿り着いた。疲労困憊の顔で一言。

「ここ？　着いた？　もう登らなくてもいい？」

分岐から先を見ると登山道が続いているのが見える。さすがにちょっとここで小休止。

「ここまで来たら楽勝だ。稜線をしばらく歩けば笠ヶ岳山頂はすぐだ。」木村さんも何とか復活したが、この考えが甘かったことが後で思い知らされることになる。

さらにガスが濃くなり、遠くが見渡せない。急坂は無いが、これまでの疲れのためか、稜線歩きも結構しんどい。名物の抜戸岩を通り過ぎ更に進むが、山頂がガスで見えないため、目標がどこだかさっぱりわからない。かろうじて見えたピーク。あれが山荘？　いや、ちょっと違う。稜線歩きも疲れてだらだら歩きになってくる。少しガスが晴れたところで思わず木村さんが絶句した。

彼方にかすかに見えるのは茶色の笠ヶ岳山荘。その後ろに見慣れた尖った頂上が。

「あ、あそこか！」

あまりの厳しい光景にとりあえず近くの岩に腰を下ろして小休止。

山頂直下にある笠ヶ岳山荘。長い稜線歩きはかなりこたえたが、笠ヶ岳山頂まであと一息だ。

独特な形の抜戸岩。主稜線に出ると急登はないが、山頂はまだまだ先。

周囲を見渡すと雪渓が残っている。山頂はガスで隠れたり顔を出したり。ルートはだんだんと険しくなり、ペンキマークを頼りに進む。何とか山荘に到着。山荘はかなり立派で、ほとんどの登山者はここで一泊するようだが、我々はそのままザックを担いで目の前の頂上を目指す。

笠の頂

山荘から無心にのぼること二十分。頂上横の祠から山頂にたどり着く。山頂の標識のところで思わず崩れ落ちる木村さん。ここで昼食とするが、あまりの疲労に食事もあまり喉を通らない。その時、木村さんの足下に小動物の顔が…。

どうやらオコジョが木村さんに挨拶に来たようだ。

午後12時丁度。登山口から7時間。遂に2,897.8m笠ヶ岳山頂に到達した。意外にも携帯電話が通じるのがちょっと不自然だ。

一八二三年に播隆上人が笠ヶ岳を再興したとき、その頂上からの神々しい槍ヶ岳の姿を臨んで槍登頂の大願を起こし、5年後の槍ヶ岳開山が達せられた。人気のある槍ヶ岳だが、ここからの眺めから歴史が始まったのである。

周辺の眺望はガスで全くダメ。またいつか来ることにしよう。まだ帰りがある。あまり長居すると暗くなる前に帰れなくなるので、早々に下山する。それにしてもすごい光景。木村さん曰く、

「爆撃の跡みたいだ。」

新穂高に帰ってきたのは夜の七時。辺りはすっかり暗くなっていた。今後多くの山に登るだろうが、他の山から笠ヶ岳を見たときはこれまでとは別の想いがよぎることだろう。

通常は一泊二日のコース。日程に余裕があるのなら抜戸岳、双六岳などとあわせて登りたい。とにかく厳しいルートなので、ペースを守って無理をしないように。特に天候の急変には注意しよう。林道の自転車走行は御法度だ。

山荘周辺は平らな石が折り重なっている。あと一頑張りで、いよいよ飛騨の名峰の頂に立つことになる。

絶景と奥深さを味わう

銚子ケ峰

絶景の頂上　白山への想い

平成十六年十月十六日
石徹白登山口～一ノ峰

一ノ峰から銚子ケ峰へ登り返す。青い空の中、天気が良いため汗がどんどん出てくる。2,000m にも満たない山だが、ここからの槍・穂高連峰の眺めは抜群で、木村さんお気に入りの山の一つでもある。

白山へ続く道

登山を始めて最初の年、木村さんが是非いきたいと思っていた山の一つが銚子ケ峰だ。白鳥の奥、石徹白の登山口から白山へとつながる道はかつて白山を開山した泰澄大師が通ったとも言われ、信仰の山である白山の特色を象徴している。このルートは銚子ケ峰を経て一ノ峰、二ノ峰、三ノ峰から別山、白山へと続く。

登山口には既に多くの登山者がいる。中には前泊の強者もおり、背中には我々より一回り大きなザックを担いでいる。恐らく山小屋で宿泊しながら白山へと縦走するのであろう。今回の最初の目標は銚子ケ峰だが、日帰りとなると別山へは無理。なら三ノ峰を今日の目標として出発する。

石段を登ると特別天然記念物の「石徹白のスギ」が現れる。推定樹齢約一，八〇〇年の大木には、泰澄大師の杖がこのスギになったという伝承も残っているようだ。

ブナやナラの広葉樹林帯をひたすら登っていくと目の前に急坂が現れる。標柱には「おたけり坂」と書かれてあり、コース最大の急斜面に差し掛かる。ここでザックを下ろして

まだ新しい神鳩避難小屋。東へ谷を下りると水場がある。

おたけり坂に差し掛かる。銚子ケ峰までの行程の中で最も難関の急斜面だ。

一息。深呼吸してから登り始める。やはりかなりの傾斜だ。後ろを振り向くと視界が広がっており、標高がどんどん高くなっていることがわかる。泰澄大師の母が血の雨、槍の雨をしのいだと伝わる雨宿りの岩を過ぎた後も厳しい登りが続くが、徐々に傾斜も緩やかになってくる。

秋空の中の絶景

気持ちよく尾根伝いに歩いていくと、目の前に真新しい小屋が見えてくる。神鳩避難小屋の中はとてもキレイで、十分寝泊まりできそうだ。まだ新しいらしく、ヒノキの香りがかすかにする。外にはベンチありテーブルありで、いたれりつくせり。おたけり坂を頑張って登ってきた疲れた体にとって一服するには最適だ。

避難小屋からは再度急な登りになるが、しばらくすると頭の上に大きな岩が見えてくる。一，七四八メートルの前衛峰にはひときわ大きな母御岩が鎮座する。さすがにこの急坂は厳しかったらしく、木村さんも汗だくで登ってきた。母御岩の上に立つ木村さん。ここを山頂と間違えたようだ。カメラを向けると、木村さんの背後には秋空の中に浮かぶように御嶽が見えている。

汗を拭きながら山頂を目指して再度気合いを入れる。ここから先は高い木々もなくなり、見通しがよくなってくる。薮の中をひたすら登ると、間もなく銚子ガ峰の山頂に到着する。いつもの如くキツかったが、やっぱり山頂は気持ちいい。山頂は三六〇度の絶景だ。この季節は空気も澄んでおり。遠くは槍、穂高連峰もはっきりと見える。

この先、ルートは一ノ峰へ続いている。その背後には三ノ峰、別山が構えており、別山

写真上／母御岩の上に立つ木村さん。ここから先は高原のような笹原を山頂に向けて進む。

写真下／御嶽の全容がはっきりと見える。こうしてみると独立峰であることがよくわかる。

銚子ヶ峰山頂からは360度の絶景が楽しめる。澄んだ秋空には御嶽、槍・穂高の山並み、背後には別山を望むことができる。白山は別山に隠れてその姿を見ることはできない。

山頂からの槍穂高連峰。槍ヶ岳は山頂横の小槍まではっきりと見える。大キレットから北穂高岳、北アルプス最高峰の奥穂高岳と険しい山並みが手に取るようにわかる。

には雪がうっすらと積もっている。さて、今日はここから足を伸ばして三ノ峰まで登る予定だ。しかし三ノ峰ははまだまだ先。見るからに遠い。

道はまだ続く

銚子ヶ峰から見た登山道に沿ってアップダウンを繰り返す。五〇分ほどで標識が立てられているのみの一ノ峰に着く。思った以上に疲れた木村さん。ちょっとだけ別山も近くなっただろうか。三ノ峰を見上げると、登山道を下りてくるパーティーの姿がある。二ノ峰を経て三ノ峰へ続く道は険しく、まだまだ先は長そうだ。帰りのことや残りの体力も考え、今日はここで引き返すことにする。

名残惜しいが、この先は今後のお楽しみ。今日は信仰の山に通じる道を辿った一日であった。木村さんも白山への想いが膨らんだことだろう。白山を目指した古の人たちがそうであったように。

一の峰に到着。銚子ヶ峰からアップダウンを繰り返し、意外にハードな道だ。

別山はうっすら雪を被っている。しばらくすると真っ白に衣替えするだろう。白山は更にこの向こうだ。

登山口はトイレも完備されているが、駐車場は十数台しか停めることができない。

石徹白から銚子ヶ峰までは比較的登りやすいルートであり、登山者は比較的多い。シーズンには熊の出没にも注意。

蕎麦粒山

これが登山道か…

平成十六年十一月六日
大谷林道～蕎麦粒山

尾根に取り付くといきなり現れるフィックスロープ。ここから先は木の根を掴みながら登る。周りはシャクナゲの木がたくさん。花の季節にあわせて登るのもいいだろう。

リベンジ

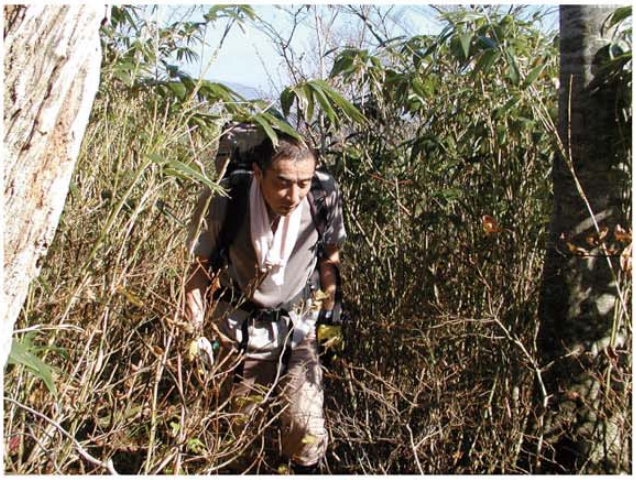
まだ梅雨の真っ只中の半年ほど前、真新しい登山道具を身につけて挑んだのが坂内の奥にある蕎麦粒山。当日は天気予報に反してあいにくの悪天候。途中の道の駅では小雨が降り出してかなり心配になってきた。鬱蒼とした草むらの中、登山口に向けて大谷林道を出発する。しかしあまりの湿気に私がいきなりダウン。小雨の中、休み休みゆっくりと林道を進むが、張りだした草や枝で思ったように進めない。折角新調したウェアも頭から足の先までびっしょり。一時間弱歩いたところで木村さんが「今日は止めよう」。やむなく引き返すこととなった。

季節は秋。前回来た六月と比べて、枯れてはいるものの草が多いような気がする。晴れているとはいえ肌寒かったので上着を着て出発。

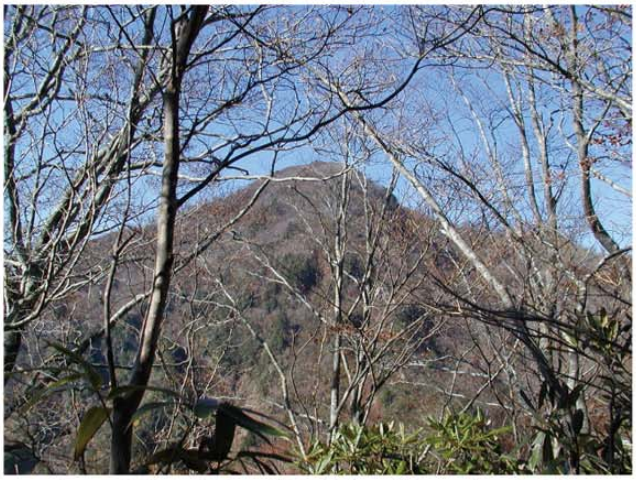
蕎麦粒山は坂内村（現揖斐川町坂内）の中程に位置する一，三〇〇弱の山であるが、坂内はどちらかというと夜叉が池へ行くハイカーで賑わい、蕎麦粒山へ登る登山者は圧倒的に少ない。というのも、ここの登山口まで草の張り出した林道を一時間強ほど歩かなくてはならない。しかも所々崩落しているので、果たして今後通ることができるのかどうかも不

写真上／木村さんの左奥の道が歩いてきた林道。ほとんど崩落しており、山側に補助ロープが張ってある。

写真下／草の張り出した大谷林道を歩く。行く手を遮る大きな落石。林道とはいえ、廃道だ。



張り出したヤブは遂に頭を越えるくらいになってきた。この後ヤブはますますひどくなっていく。



木々の間から見える蕎麦粒山。蕎麦の実にあやかって名付けられたとか。

明だ。

出発は小広場のある西俣出合。歩き始めるといきなり道がなくなるが、右手にフィックスロープがあり、林道をショートカットして急斜面を登り切ると林道本線に出る。この先林道をひたすら歩くが、路肩が崩落している箇所があるので慎重に、所によっては壁に設置された補助ロープにつかまりながら進む。林道終点は広場になっているが、草が茂っており広場という感じがしない。更に道なりに奥へ進み、沢を渡ると蕎麦粒山登山口の目印である、色褪せた赤いテープが巻いてある木がある。ここから蕎麦粒山登山の始まりとなるのだ。

木の根を掴みながら

衣服は草や木の朝露ですでにビショビショ。さあ、登るぞ！ と意気込んだものの、いきなり「カベ」が立ちふさがる。

「こ、こんなところ登るの？」

目の前に見えるのはフィックスロープ。シャクナゲが一杯のルートを慎重に登っていく。木の根や枝につかまりながらぐんぐん登り、あっという間に標高も上がっていくが、本当にここが登山道なんだろうかと思うほど木の根や岩が行く手を遮っている。

まずは最初の目標である小ピークを目指す。ほとんど力任せに強引に登っていく。谷をのぞき込むと紅葉が色づいているが、そんな余裕はない。張り出した低木で半袖の木村さんの腕は傷だらけ。いつのまにか熊のことはすっかり忘れている。

あまりに厳しい登山道に途中で小休止。これは六月に引き返した木村さんの判断は正解だった。雨の降る中、ちょっとこの山は登る気はしない。倒木の上に腰を下ろしてしばし休む。蕎麦粒山はその形が蕎麦の実に似ていることからその名前がついたとか。左手にその蕎麦粒山が見える。

じっと山頂を見つめる木村さん。果たして辿り着けるのだろうか。

奥揖斐のそのまた奥

十分休憩を取って再出発。少しずつ傾斜も緩やかになり、小ピークの肩に着く。ここから一旦下り、山頂まで一気に登り返すことになるが、登山道はヤブに覆われていく。遂には木村さんが隠れる程にまで生い茂るヤブを掻き分けていくと、目の前に蕎麦粒山山頂が現れる。山頂は狭いが、三六〇度遮るものはなく、景色も良い。西俣出合を出発してから約四時間半。ようやく半年前のリベンジを果たした。厳しい道を上り下りしたので、山頂でゆっくりしたいが、まだ帰りがあるためここは早めに下山することに。

低木の間を抜けるように進む。木村さんの腕は細かな傷だらけ。かろうじて進む方向はわかるのだが。

往きが厳しかっただけに、下山は急斜面を下りるので気が抜けない。登山口に近くなると、地面というより木の根の上を歩いているようである。最後はフィックスロープの助けを借り、木に捕まりながらようやく登山口に辿り着く。しかしここからまだ林道歩きが待っている。朝は張りだした草木と朝露でうんざりだったが、帰りは余裕をもって歩くことができそうだ。草を掻き分け、ロープで急斜面を下りてようやく車の所に到着する。

それにしても厳しい山だ。しかし奥揖斐の静かな自然の中に放り出されたければこの山はオススメ。ただし、梅雨から夏場にかけてはヒルにご注意あれ！

ようやく蕎麦粒山頂上に着く。狭い頂上からは360度の視界が広がるが、厳しい登山道を登ってきた満足感で一杯だ。

写真上／往きも帰りも気が抜けない急斜面。ほとんど地面ではなく木の根の上を歩き続ける。

写真下／最後はフィックスロープの下り。改めて往きはここを登ったのだと思う。

霊仙山

これが鈴鹿の山々

平成十七年五月二十八日
醒ケ井登山口～霊仙山最高点

鈴鹿山脈独特の石灰岩が露出した登山道を山頂に向かって登る。背後には琵琶湖や米原の街並みが広がる。霊仙山は長い尾根を派生する大きな山であり、お猿岩からは立木も少なく、快適な山歩きが楽しめる。

鈴鹿山脈の北端

もうすぐ梅雨に入りそうな五月下旬。木村さんに誘われたのは霊仙山。そういえば鈴鹿の山はこれまでに登ったことはない。霊仙山は鈴鹿山脈の北端に位置し、琵琶湖が一望できることで人気のある山である。長い尾根を派生するこの山は登山口もたくさんあるようだが、今回は醒ケ井養殖場から奥へ入った登山口から登る。

登山口に辿り着くと既に何台もの車が停まっている。登山口は綺麗に整備されていて、登山者の多い山だということがわかる。あいにく最初に辿り着いた所は谷山谷から登る登山口で、当初予定していた所とは違ったため、車に戻り再度出発。途中、鉄道の駅やバス停から歩いてきているのだろうか、何人もの登山者とすれ違う。

醒ケ井養殖場を過ぎて奥へ入っていくと、登山口がある広場に出る。登山口は休憩小屋があり、「転ばぬ先の杖」と書かれた看板の下には木の枝で作られた杖が立て掛けられている。

登山口から進むとすぐに廃墟が現れる。かつての榑ガ畑集落の跡だ。昭和三十六年頃に最後の住人が転居して無人となったため、廃集落になっておよそ五十年経つことになる。半世紀前の人の営みの跡を歩いていくと、「かなや」と書かれた小屋に辿り着く。脇に渓流の水が引かれた小屋は閉鎖されているが、夏期の休日やゴールデンウィーク以外休業とか。

かなやから山腹に取り付き、登山道を登っていくと、間もなく汗拭峠に出る。ここは二合目になり、霊仙山に向かう道と多賀へ抜ける道に分岐している。名前のごとく、汗を拭いて出発。登山道は比較的整備されており、見晴台のある五合目に着く。ここまでは至って普通の山のように思われるが、ここから先が鈴鹿の山を象徴する光景が次々に現れてくるのだ。

汗拭峠から本格的な登山が始まる。初夏の山は気持ちがよい。

榑ガ畑小屋の「かなや」。小屋の脇に渓流の水が引かれている。

かつて集落のあった榑ガ畑。まだ廃墟が残っている。

墓石石灰岩

周りの山を見渡してみると、あちらこちらにポツポツと白い岩が見える。だんだん登山道も狭くなり、白い岩がゴロゴロ現れてくる。鈴鹿特有の石灰岩だ。これらの岩は墓石石灰岩（カレンフェルト）と呼ばれ、白い石灰岩がたくさんのヒツジの群れのように散らばっている。国内では山口県の秋吉台が有名だ。気がつくと周りの高い木々がなくなってきている。岩に手を掛け、悪戦苦闘しながら登る木村さん。どうやらルートでここが最も難関のようだ。足下に注意しながら慎重に登っていくと、急に目の前の視界が広がる。

立ちすくむ木村さんの横には小さな岩がある。看板を見ると、「ここはお猿岩です。」

辺りを見渡すと、ちょっと霞がかかっているが、琵琶湖と米原の街並みが眼下に広がっている。思わず絶景に見とれる木村さん。高い木もないので遠くまで見通せ、疲れも吹き飛んでしまう。

登山道の先は北霊仙山から霊仙山に続くなだらかな隆起が見えており、改めてこの山が大きな山であることが手に取るようにわかる。

ここでザックを下ろして休憩。初夏の山はやはりいい。次の目標は目の前に見えるピーク、北霊仙山だ。さほど傾斜もなく、周りの景色を楽しみながら進む。お猿岩から十分程度で小さな鳥居があるお虎が池に到着。琵琶湖の形に似ているそうだが…言われてみると何となく似ているような。

カレンフェルトが点在するなだらかな斜面を登っていくと、東の谷山から続く柏原道との合流点、北霊仙山（経塚山）に着く。柏原道は今朝間違えた登山口にも続いているようだ。涼しい風が吹く中、木村さんの眺める先には扁平な形をした伊吹山がある。霊仙山まではあと一息。

既に周りに高い木々はなくなっている。石灰岩がゴロゴロした斜面を登り切った木村さんの目の前に広がる光景は…

写真上／カレンフェルトが点在する斜面を足下に注意しながら慎重に登っていく。

写真下／お猿岩からは一気に視界が広がる。木村さんの右手には北霊仙山から霊仙山に続くなだらかな稜線が見える

写真上／木村さんが示す方向が霊仙山頂。最後の一頑張りだ。それにしても風が心地よい。

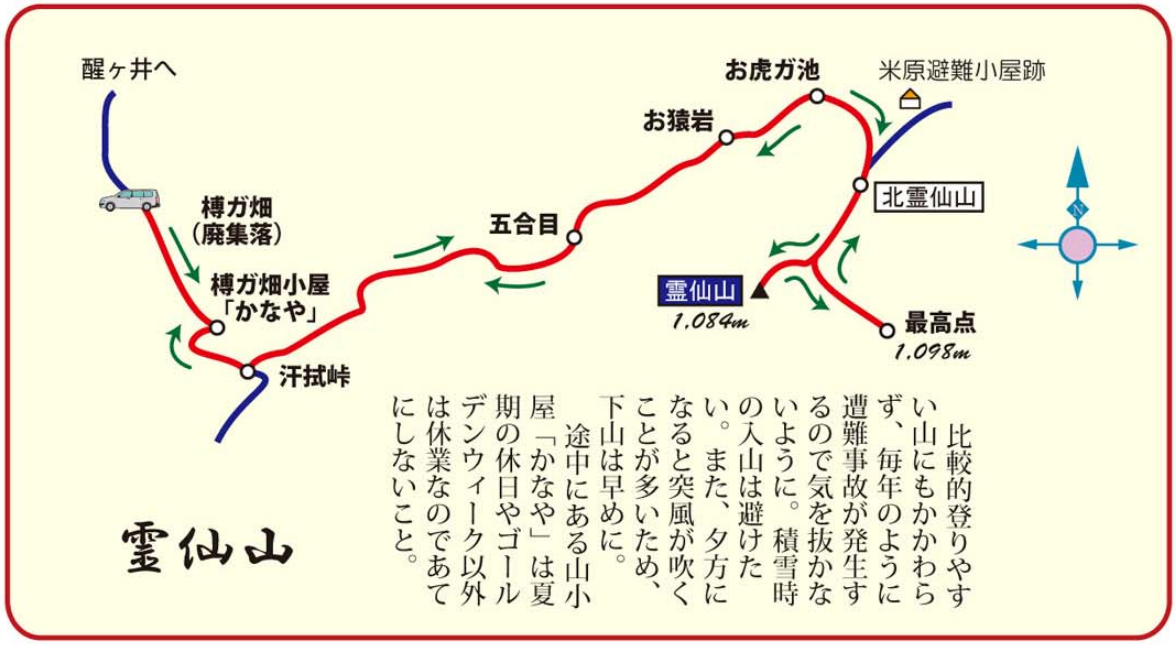
写真左／「最後の登りはしんどかったな〜。」頂上は遮るものが無く、360度見渡せる。天気も暑くもなく、寒くもなく、いいコンディション。

近江の名山

北霊仙山から一旦下り、最後に再度登り返す。山頂手前で最高点との分岐を右に進むと三角点のある霊仙山に到達する。ここも周りは遮るものはない。目の前の伊吹山を眺めながらお昼ご飯とする。ここより伊吹山の方が標高が高いはずなのだが、なぜかこちらから見下ろす感じになるのはちょっと変だ。

霊仙山は標高一，八十四メートル。この山の最高点、標高一，九十八は山頂の東隣のコブにある。帰りに最高点に寄り道して来た道を下山する。

春から初夏にかけては綺麗な花が楽しめ、まだまだ自然も多く残っているこの山には生息する動物も多い。そのためか、山頂はやけに獣臭がきつかった。臭いだけならいいが、夏場の鈴鹿の山に登るときは注意することがある。奥揖斐同様、ヤマビルの襲撃には覚悟するように！



比較的登りやすい山にもかかわらず、毎年のように遭難事故が発生するので気を抜かないように。積雪時の入山は避けたい。また、夕方になると突風が吹くことが多いため、下山は早めに。

途中にある山小屋「かなや」は夏期の休日やゴールデンウィーク以外は休業なのであてにしないこと。

横山岳

春の花を求めて

平成十八年五月六日
白谷出合～横山岳西峰・東峰

西峰から東峰への尾根にはまだ雪が積もっている。まだまだ冬の光景であるが、木々や草花は来るべき春の準備に忙しいようだ。

湖北の双耳峰

登山も三年目。ゴールデンウイークもあと二日となった土曜日、木村さんから景色の良い山にとお誘いがあった。すっかり暖かくなった、というよりも汗ばむ季節に入った今、さぞかし山は花がきれいに咲き誇っているだろう。という訳で、今回は春の花で有名な滋賀県の横山岳に登る。

横山岳は滋賀県の琵琶湖の北側に位置し、東西二つのピークを持つ双耳峰である。通常は国道三〇三号・木之本から網谷林道を経て白谷出合にある登山口から登る。この白谷を登るルートには経ガ滝や五銚子ノ滝など大小の滝がある渓流があり、人気のあるコースであるが、その他にも西のコエチ谷出合から三高尾根伝いに登るコース、網谷林道奥から東尾根伝いに東峰へ登るコースがある。今回は白谷ルートを予定していたのだが、登山口に雪渓崩落寸前で通行止めとの看板が立ってたため、三高尾根コースから登ることにする。

三高尾根コースの登山口は、駐車場から五分ほど歩いたところにある。ここからコエチ谷に沿って林道をしばらく進むが、林道沿いの沢に目を移すと沢にはまだ残雪が見られる。

十分ほど進むと林道が終わり、フィックスロープが備わった急登になり、いよいよ本格登山が始まる。まずは尾根に出なければならない。登山道は整備されているが、足をかける岩や木の根が少ないので、滑らないように気をつけながら登る。

コエチ谷出合から登山道をフィックスロープを辿りながら急登に挑む。

さすが花の山だけあってカタクリやイカリソウなど今が旬だ。かつては山岳霊場として栄えた山も、現在は花を楽しむ登山者で賑わっている

春の花々

ようやく尾根に出る。いきなりの急登にバテてしまった木村さん。ここで、墓谷山から延びている登山道と合流し、まもなく鳥越峠に到着する。ここからも厳しい急登の連続だ。しばらく登ると望横ベンチの看板が現れ、よくよく見ると木でベンチらしきものが作ってある。稜線を望むと所々にまだ残雪が見える。どうやらさらに厳しい急斜面が待っていそうだ。

疲れた木村さんの眼前に小さな花が現れる。そういえばここは花で有名な山。小さな花はカタクリ。どうやら辺り一帯はカタクリの群生地のようだ。カタクリの他にもイカリソウ、イワウチワ、ショウジョウバカマなど派手ではないが、疲れた体には一服の清涼剤にもなる。

更に続く急登。頑張って登っていくと、三高尾根展望台に到着する。登りきったところで振り向くと、そこには絶景が待っている。あそこにうっすらと見えるのは…琵琶湖？いや、余呉湖だ。思わずニンマリする木村さんだが、山頂方向に見える残雪が気になる。

雪渓の向こう側

展望台から枯木をかき分け、さらに斜面を頂上に向かって進む。すると木村さんの行く手に大きな雪渓が立ちはだかる。思い出すのは早春の能郷白山。登山道が完全に雪に覆われている。引き返すべきか、それともこのまま進むか…。よく見ると先行者のトレースが確認できる。ここは細心の注意を払って雪渓を登ることにする。

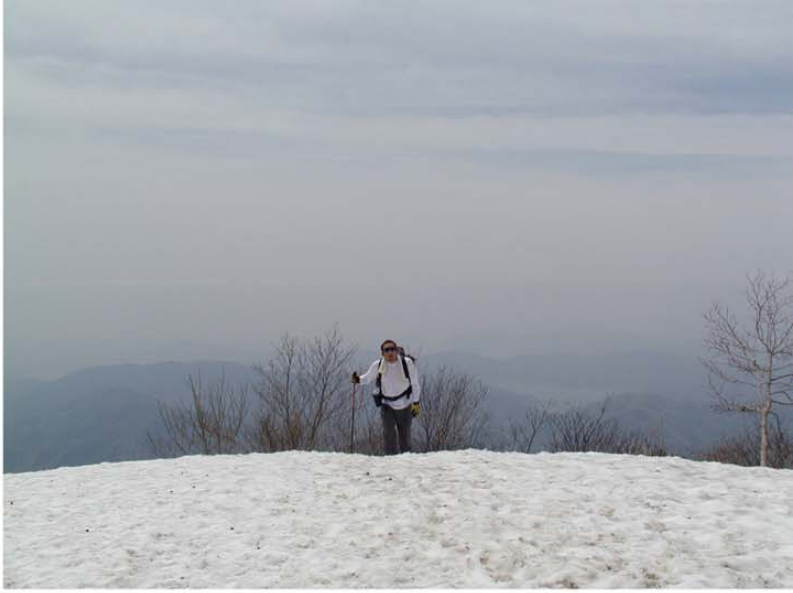
雪渓を登りきった木村さん。その眼前に現れたものは、山頂の標識だ。最後はどうなることかと思ったが、あっけなく山頂に辿り着くことができた。三角点のある山頂は双耳峰の西側。雪渓があるにもかかわらず、山頂は寒くない。アメダスの前でお食事タイムとする。

昨シーズンは雪が多かったせいか、周辺には折れた大木も見られる。雪渓の脇には大きな割れ目もあり、いつ崩れてもおかしくない。あまり近寄らないように山頂からの絶景を楽しむ。他の登山者にルート情報を聞いたところ、ここから東峰へ尾根伝いに行けるとのこと。このまま引き返すよりも別のルートも楽しみたいので、東峰を目指すことにする。

雪に覆われた尾根伝いの登山道を東峰に向かって進む。このルートは地元の方々が切り開いたそうで、大きな起伏はほとんどない。木に付けてある目印を辿っていくと間もなく

三高尾根展望台から景色を楽しむ木村さん。その背後には登山道を遮るように雪渓が横たわっている。

木村さんの進む方向に現れたカタクリの群生。疲れも吹き飛んでしまうくらいだ。



山頂直下の雪渓を登る。まだまだ山頂一帯は冬の様相だ。

東峰に着く。不思議なことに、生暖かい風も吹いている。

この先、雪はなくなり、イワウチワの群生を楽しみながら東尾根を下山する。すれ違った登山者からも「花きれいですね」と声をかけられる。

東尾根登山口から林道を歩くこと二十分ほどで駐車場に到着。ここで五銚子ノ滝から下りてきたおばさん達に遭遇する。やはり山頂までは行くことができなかったばかりか、ヘビは出るわ、親子連れの熊も見るわでエライ目に遭ったとか。カタクリの群生を教えてあげたら、うらやましそうにしていた。

そう、熊やヘビにとっても長い冬が終わり、ようやく活動できる季節になってきたのだ。今回は出会わなかったが、どこかから我々を見ていたのかもしれない。

横山岳

コースは比較的整備されており、道に迷う可能性は低いが、春先は残雪で荒れている箇所もあるので注意されたい。

花の山で有名なので、春先は駐車場は満車になる。他車の迷惑にならないように。

熊の出没地でもあるので、最低でも熊鈴は必携だ。

西峰から東峰は若干のアップダウンはあるものの、急坂はなく、左手に白山連峰を見ながらの気持ちのいいルートだ。

雪渓を登ると横山岳西峰。ここから見下ろす余呉湖は見事。木村さんの後ろにある小屋にはアメダスが設置されている。

三方岩岳

青空の中の大岩

平成二十二年九月二十日

馬狩料金所～越中岩

青空の中にそびえる飛騨岩をバックに登る木村さん。昨年春に登ったときは残雪のため途中で引き返したが、今回は絶好の天気。遠くの槍穂高も一望できるほどだ。

あの大岩

今年はちょっと梅雨が長引いているようだ。なかなか明けない梅雨。明けたと思ったら週末は必ず雨。あっという間に八月は過ぎ、九月も下旬となっていた。

ようやくスケジュールと天候が合致。目指すは昨年のゴールデンウィーク明けにアタックしたものの、残雪に行く手を遮られ引き返した三方岩岳だ。どうやら天気は何とかもつ模様だが、天気予報はあてにならず。シルバーウィーク真っ只中、混まないことを祈ってスーパー林道料金所へ向かう。残暑の中、リベンジなるだろうか。

昨年同様、スーパー林道料金所横から登る。既に昨年登っているのでルートは確認できているのだが、登山道に入った途端、多くの草が張り出している。最近はここからはあまり人は登っていないのだろうか。間もなく登山口に到着。まずはここから白川郷展望園地を目指す。

登山口から登ること約四十五分。スーパー林道との合流点であるコンクリートの壁が見えてきた。料金所が開くのは朝七時。下からは多くの車が上ってきている。下の駐車場で隣に駐車していた軽トラのおじさんがクラクションを「プッ」と鳴らしていく。ちょっとここで小休止。木村さん久々の登山でちょっとお疲れ気味か。

間もなく白川郷展望園地に到着。ここにも多くの観光客がいるが、登山者は我々だけ。今日は天気がよくてラッキーだ。遠くには北アルプスが見えるはずだ

料金所から登っていくと、登山道は一旦白山スーパー林道に合流する。

▲飛騨岩。垂直に切り立った岩峰は圧巻だ。

◀越中岩。スーパー林道駐車場から登ってくる登山者で賑わう。

四等三角点を過ぎると頭上に大岩が現れた。これが三方岩岳と呼ばれる所以だ。

が、ちょっと雲が多くてはっきりしない。

三つの岩峰

展望園地から更に進むと、高度はどんどん上がっていく。間もなく二本の大きな松が寄り添うように立っている二本松に到着。ここからの白川郷の展望も絶景だ。道なりに登山道を進んでいくと、左手には白山系の険しい山容が目に入ってくる。所々崩れている箇所もあり、気が抜けない。

ピークらしき地点に到着すると右手に小広場があり、そこには三角点が埋められている。ここが前回の到達地点だったのだろう。周りは低木に囲まれているが、前回は雪の上。ということは、最低でも数メートルの残雪の上を歩いたのか。

四等三角点を過ぎると目の前に三方岩が現れ、道はここから下っていく。下りきったコルで登る前の小休止。ここから三方岩に向けての登りが始まる。見上げると飛騨岩がどんどん近づいてくる。青空にそびえる飛騨岩は雄大そのもの。

振り返ると先ほどは一部しか見えていなかったアルプスがはっきりと見えてくる。登山道は飛騨岩の横を通り越中岩へ延びている。アルプスをバックに進む木村さん。間もなく山頂だろうか。

三方岩神

越中岩に到達する。右手は崖なので立入禁止のロープが張ってある。このまま進んでいくと広場に出る。反対側からはスーパー林道の三方岩駐車場からの登山道が見えている。

ここが山頂なのだろうか。標識には「三方岩神」と書かれている。後で調べたのだが、最高点（一，七百三十六メートル）は別にある。飛騨岩から越中岩へ向かうルートで、野谷荘司山と三方岩岳へのルートの分岐に出る。どうやら野谷荘司山方面へ左折し、飛騨岩上部に差し掛かったところが最高点で、特に標識はないとのこと。

三方岩岳は飛騨岩、越中岩、加賀岩の三つの岩から成り立っており、その一帯が山頂であるとすると、最高点ではないが、今回の越中岩の広場を三方岩岳山頂と考えてもいいだろう。

目の前には雲一つ無い青空の中に白山がそびえ立っている。ここでちょっと早いお昼ご飯。お湯を沸かしていると、三方岩岳駐車場からぞろぞろとたくさんのハイカーが上って来る。ここまで四十分ほどで来られるそうで、よくよく見ると軽装の者が多い。静かな山から一転、賑やかでうるさくなってしまい、さ

山頂直下で北アルプスを望む。槍の穂先、大キレット、穂高連峰をこれほどはっきりと一望したのは始めて。雲の上に浮かんでいるようだ。

山頂からは目の前に白山が見える。堂々たる山容は威圧感すら感じさせる。

越中岩にあるピーク。丸太で作られた標識には「三方岩神」の文字が彫られている。

っさと食事を済ませ下山とする。紅葉の季節は山頂は一杯になるようだ。

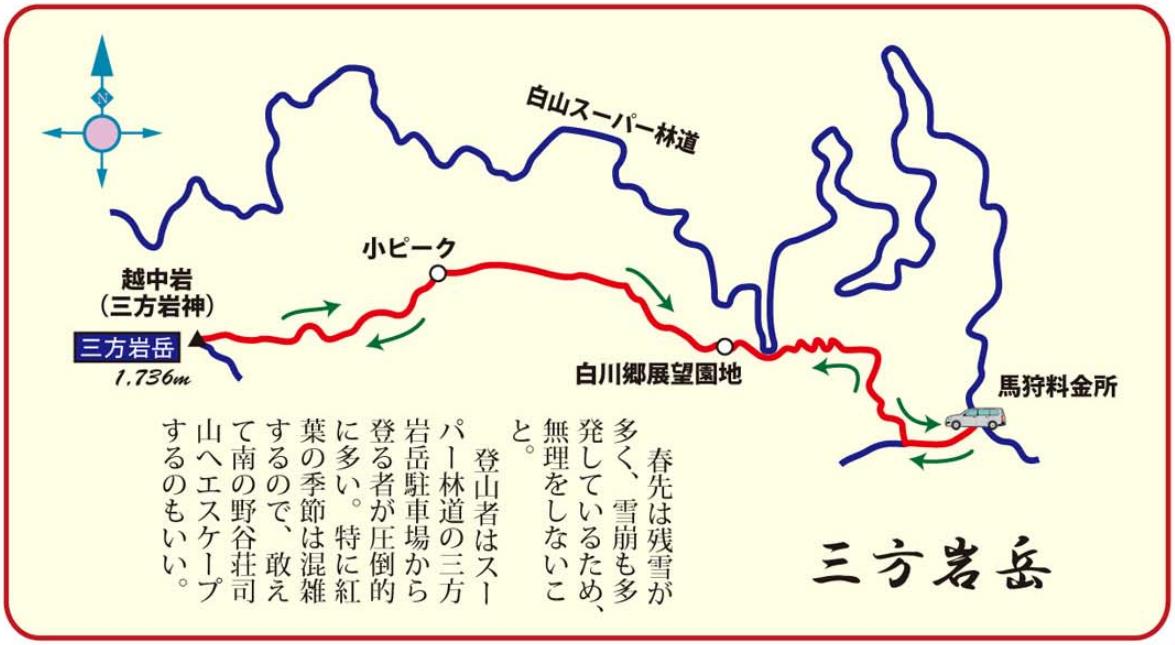
賑やかな山頂を後にし、はるか彼方のアルプスを満喫する。青空の中、槍ヶ岳、穂高連峰もはっきりとわかる。双眼鏡で覗くと手前に稜線がもう一つあり、木村さんと登った笠ヶ岳も確認できる。

三方岩岳は山頂手前まではスーパー林道で車で上がってくることができる。しかし見事なブナ林や下から見上げる三方岩を楽しむのなら是非料金所横から登りたい。

我々は健脚ではない。技術も経験もまだまだだが、敢えて難コースに行きたがる木村さんは、より山の素顔を見たいのだろう。

今日も無事に下山した。木村さんは次の山を目指す。

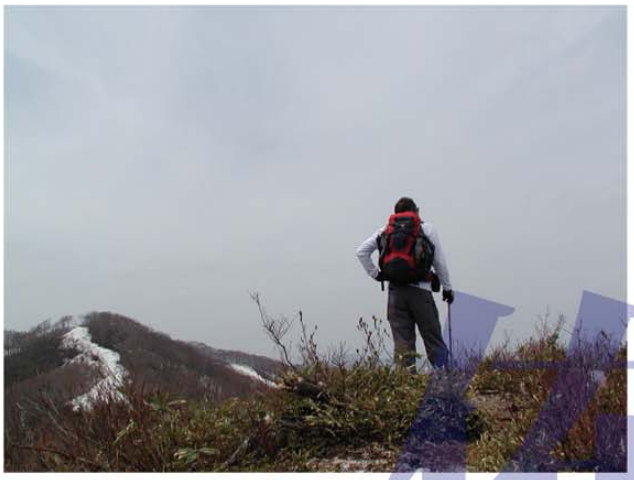
眼下には世界遺産の白川郷の集落、遠くには槍穂高連峰の北アルプスが手に取るように見える。



春先は残雪が多く、雪崩も多発しているため、無理をしないこと。

登山者はスーパー林道の三方岩岳駐車場から登る者が圧倒的に多い。特に紅葉の季節は混雑するので、敢えて南の野谷荘司山へエスケープするのもいい。

In the Mountains



巷では登山ブームと騒がれているが、ご存じのように今に始まったことではない。古くは大正時代に登山が一般化したという説があるが、近年では若者が登山に興味が薄れ、逆に中高年の登山人口が増大した。これに伴って遭難事故が多発し、ニュースになる度に「またか…」と若者は冷ややかな目で見たものだ。

その若者達が山に登るようになってきた。どうもマスコミや関連業者が格好よく登山を取り上げたことがブームの始まりらしい。

何に刺激されたのか、木村さんはバイクに乗りたいと言い出し、教習所に通って免許を取得した。今では登山にバイクに忙しい週末を過ごしている。ところで、登山とバイク、危険なのはどちら？ と聞かれたらどう答えるだろう。バイクと答える人の方が多いかもしれない。

通常、山に登るのに免許は要らない。保険に加入する義務もない。山でのルールはほとんどが暗黙の了承であり、ルールに反したからといって罰則や違反金もない。どんな装備でどんな格好で登ろうと構わない。一般道で交通事故が起こると大抵はすぐに警察や救急車、レスキューが駆けつけてくれる。山ではどうか。

ブームで多くの人が登山を楽しみ、経済が活性化することはいいことだ。我々もある意味ブームに乗って登山を始めたと言える。

木村さんにとって登山は山との真剣勝負。これまで大きな事故に遭わなかったのは運がいいと思うようにしている。相変わらず中高年の遭難事故は多発しているが、若者の事故も増えてきているそうだ。

今年の９月の連休、涸沢は張られたテントで満員だったとか。静かな山を楽しみたい自分にとっては想像するだけでもゾッとする。さっさとブームなんて去ってほしいと思うが、せっかく根付きそうになっている文化（というほどのものでもないか）が廃れるのはちょっと寂しい。

あれだけたくさん走っていたクロカン四駆が今では見ることが珍しくなってしまったように、「ああ、山ガールっていたな…」なんてなりませんように。

編集後記

二十世紀が終わる頃、八年間飛騨の高山市に在住していたが、山といえば職場から帰るときに雪を被った乗鞍岳を見て「ああ、きれいだな…」と思う程度だった。山に何も興味がなかった当時から思えば、自分が見上げていた所に登っているなんて未だ変な感じがする。

最初に登ったのが納古山。たまたまデイパックの中に入っていたデジカメ。それがなかったらここまで木村さんを撮れなかっただろう。山では先回りして後から登ってくる木村さんの姿を記録していくのが恒例。たまにポーズ取るけど、やはり素の木村さんの方がかっこいい。

作る作ると言ってなかなか手が付けられなかった俺山写真集だが、登山を始めて十年に突入する前に何とか作成することができた。山に登る木村さんを追い続け、振り返ってみればずぶの素人から始めた割にはよくこれだけ登って記録したものだと改めて思う。

さて、木村さんが次に登る山は何処だろうか。また先行してカメラ構えなきゃ。

（木村さんの【俺山】管理人　cirrus）

宇宙から見れば裏山とエベレストの標高差なんて
誤差の範囲にもならない。
地球の歴史からすれば人の一生は瞬く間。
その一瞬の中でわずかな標高差を登った、ダメだったと
満足したり、落ち込んだり。
たかが山登り。
一瞬だから面白い。

木村さんの俺山

木村さんの挑戦は続く

俺山
平成二十四年三月三十一日発行
発行者　木村さんの俺山写真集製作委員会

Not for sale

Copyright © 2011 木村さんの俺山